

令和 4 年 5 月 9 日現在

機関番号：15101

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21959

研究課題名（和文）近現代英語小説における現在時制の使用法の通時的研究

研究課題名（英文）A diachronic approach to the use of the present tense in modern and contemporary English novels

研究代表者

重松 恵梨（Shigematsu, Eri）

鳥取大学・教育支援・国際交流推進機構・准教授

研究者番号：80884113

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近現代英語小説における語りスタイルの一動向を、語りの時制（特に、語りにおける現在時制の使用方法）に着目して考察し、その言語・文体的特徴を記述することであった。本研究では、語りにおける現在時制の使用方法が変容していく過程に焦点を当て、現在時制が、どのように、そしてなぜ語りの時制として機能するようになったのかを分析した。また、語りの時制としての現在時制の使用方法に関する歴史的プロセスを、知覚描写との関係から言語・文体レベルで明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代英語小説においては、語りにおける時間と時制の関係が変化し、時制の使用方法も変容し続けている。現代小説に顕著にみられるようになった「現在時制語り」によって、これまで物語は過去時制で語られるものであるという人間の認識も変化しつつある。本研究は、現在時制語りや語りスタイルとしてその地位を確立するまでの歴史的プロセスに着目し、とりわけ現在時制と知覚描写の関係性に焦点をあて研究していくことで、語りスタイルの研究に新たな視点を加えることができた。

研究成果の概要（英文）：This study aims to observe both narratologically and stylistically the historical transformation of a narrative style by focusing on the use of narrative tense, especially the narrative present tense. It has diachronically analysed the use of the present tense in the narratives from the eighteenth to twenty-first century and revealed how the present tense has become to function as a narrative tense in narrative. It has also revealed the importance of immediate perception in contemporary present-tense narrative.

研究分野：物語論、文体論

キーワード：現在時制 現在時制語り 現在時制語りの文体的効果 語りスタイルの変容 知覚描写

## 1. 研究開始当初の背景

近現代英語小説における時制の使用方法の研究動向として、小説の語りにおける時間と時制の関係については、早くから多くの物語論者たちが議論してきており (Weinrich, 1964, Hamburger, 1973, Genette, 1980 等)、中でも語りにおける現在時制については、Casparis (1975)、Fleischman (1990)、Fludernik (2003) が議論している。しかし、これらの研究においても、語りにおける現在時制の使用方法の歴史の変遷についての議論は十分であるとは言えない。とりわけ現代小説においては、語りにおける時間と時制の関係が変化し、時制の使用方法も変容し続けている。現代英語小説で顕著に見られるようになった現在時制語りについては、Fludernik (1996, 2003)、Avanessian and Henning (2015)、Huber (2016) などが、語りの時制としての現在時制の機能や、現在時制語りのタイポロジーについて考察している。最近では、Ikeo (2019) が現在時制語りの小説は過去時制語りの小説よりも語彙・文レベルで口語的であること等を質的・量的分析を踏まえて指摘している。これらの研究を除いては、現在時制語りの言語・文体レベルの研究は、未だ萌芽的段階にあると言える。また、現在時制語りと密接な関係にあると想定される知覚描写の関係性については、Casparis (1975)、Fleischman (1991) を除いてはほとんど議論されておらず、さらなる研究が必要である。

## 2. 研究の目的

本研究では、3つの「問い」(①小説における現在時制の使用方法は、どのような歴史の変遷を辿ってきたのか。②語りに現在時制を用いることで、物語構造がどう変化し、どのような文体的効果が生まれるのか。③現在時制語りを語りのスタイルとして用いることで、何を描こうとしているのか。)を設定し、これらの問いを通して、現在時制がどのように、そしてなぜ語りの時制として機能するようになったのかを、歴史的視点から考察していくことが、本研究の目的である。

## 3. 研究の方法

本研究では、上記目的を達成するために、物語論・文体論的視点から、具体的には下記の通り方法論を設定し、研究を進めていく。

- (1) 小説の語りにおける現在時制の使用方法を通時的に考察するために、小説勃興期の18世紀初期の小説から20世紀のモダニズム小説を扱い、伝統的な過去時制語りにおける現在時制の機能・役割がどのように変化してきたのかを、現在時制の機能を3つに分類して考察する(①直示的現在:語り手のコメントや読者への語りかけに使用され、語り手の「今」を指し示す現在時制で、プロットを中断する機能を持つ、②歴史的現在:ある特定の過去の出来事の描写に使用され、その出来事を追体験させる効果を持つ、③登場人物の直示現在:直接話法や内的独白等の意識描写に用いられ、登場人物の「今」の視点を直接的に映し出す現在時制)。
- (2) 上記3つの現在時制の使用方法が、現代英語小説においてどのように語りの時制として機能するようになったのかを、現在時制の多義性と、現在時制と知覚描写の関係に着目して、21世紀の現在時制小説を事例に、言語・文体分析(例:統語構造、口語性、話法、語りの視点等)を行う。

## 4. 研究成果

### (1) 語りのタイポロジーの再構築

現代英語小説では、時制(語りの時制として過去時制を使用するか、現在時制を使用するか)も語り方の選択の一つとなっていることを踏まえ、従来の語りのタイポロジー(Cohn, 1981)の再構築を試みた。本研究では、語り手の持つ選択肢を考える際に、人称・時制・視点の3つの観点が必要であることを示し、従来のタイポロジーにおける語り手の選択肢では触れられていなかった「時制」の選択について議論した。過去時制で語られた小説と同様、現在時制で語られた小説でも、語り手は語りの中で人称・視点の選択を行うことができ、現在時制語りにもさまざまなタイプの語り方があることを、現代英語小説を事例に例証した。さらに、現在時制語りにおいては、作中の視点人物となる者の知覚自体が物語を作り出す傾向にあることを述べ、現在時制語りにおける体験的知覚の重要性を議論した。上記研究成果は、広島英語研究会にて口頭発表を行った。

(2) 知覚描写の形式と機能の歴史的変遷

従来の過去時制語りの小説では、**represented perception** と呼ばれる語りの技巧が取り上げられ、自由間接スタイルを構成する形式として主にモダニズム小説における知覚描写が研究対象となっていた。本研究では、小説勃興期から現代に至るまでの知覚描写の形式と機能の変化を考察した。まず、18世紀では、**represented perception** に近い視点人物の意識を通じた知覚描写も見られるものの、その数は少なく、また、物語が視点人物の意識を通してではなく、語り手の視点から描かれる場合が多いため、機能面では語り (**narration**) と強く結びついていることがわかった。19世紀の小説では視点人物の意識を通じた描写が増えていくものの、**represented perception** の技巧はまだ語り手に帰する部分が多い。さらには、知覚動詞を使用しての知覚描写も多く、時代を遡るにつれ、知覚は語り手が起こった出来事として報告する傾向にある。20世紀に近づくにつれ、徐々に知覚は意識の一部として描かれる傾向が強くなったが、21世紀の現代英語小説では、自由間接スタイルの言語形式を使用せずに、語りの時制を現在時制とすることで、物語全体が作中人物の体験的知覚によって形作られるようになってきていることがわかった。上記研究成果は、国際誌 *Journal of Literary Semantics* に論文として投稿した (Shigematsu, 2022)。

(3) 語りに見られる口語性と現在時制の関係性

現在時制の特徴として議論されてきた口語性に焦点を当て、小説勃興期の作家ダニエル・デフォーの自伝小説を事例に、話法に見られる、過去時制から現在時制への時制の交替を考察した。例えば、直接話法の伝達部における時制の交替 (**said** と **says**) は、当時の口語的表現を模倣していること、自由直接話法における時制の交替は、語り手としての「私」が、話し言葉ではごく普通に起こるように、自分の物語を語っていくにあたって、何度も時間軸を心理的に行き来しながら物語を語っていく様子を言語的に表していることを例証した。上記研究内容は、中国四国英文学会のシンポジウムにて口頭発表した。

(4) 現在時制語りの言語・文体的効果

現在時制語りの言語・文体的効果を明らかにするために、本研究では、アリ・スミスの *How to Be Both* (2014) を事例に、本作品における現在時制の用法と意味について考察した。本作品における独特な語りの時制としての現在時制の使用法が、主人公である **George** の「語り」と「経験」をさまざまなレベルにおいて曖昧にし、作品のテーマである「両方になること」に寄与していることを議論した。現在時制の使用は、単に口語性や作中人物の体験的知覚を示唆するだけでなく、そうすることで、語りの構造自体を変化させる、つまり、「体験したのちに語る」という語りの大前提を脱構築し、「語り」と「経験」のレベルの区別を曖昧にすることを例証した。上記研究内容は、国際誌 *Language and Literature* に論文として投稿した (Shigematsu, forthcoming)。

<引用文献>

- Avanessian, A. and Henning, A. (2015) *Present Tense: A Poetics*. London and New York: Bloomsbury.
- Casparis, CP. (1975) *Tense without Time: The Present Tense in Narration*. Bern: Franke.
- Cohn, D. (1981) "The Encirclement of Narrative: On Franz Stanzel's *Theorie des Erzählens*." *Poetics Today* 2(2): 157-182.
- Fleischman, S. (1991) Fleischman, Suzanne (1991) "Towards a Theory of Tense-Aspect in Narrative Discourse." In Jadranka Gvozdanović, Theo Janssen and Östen Dahl eds. *The Functions of Tense in Texts*. Amsterdam: North-Holland. 75-98.
- Fludernik, M. (1996) *Towards a 'Natural' Narratology*. London: Routledge.
- Fludernik, M. (2003) "Chronology, Time, Tense and Experientiality in Narrative." *Language and Literature* 12(2): 117-134.
- Genette, G. (1980) *Narrative Discourse: An Essay in Method*. New York: Cornell University Press.
- Hamburger, K. (1973) *The Logic of Literature*. London: Indiana University Press.
- Huber, I. (2016) *Present Tense Narration in Contemporary Fiction: A Narratological Overview*. London: Palgrave Macmillan.
- Ikeo, R. (2019) "'Colloquialization' in Fiction: A Corpus-driven Analysis of Present-tense fiction." *Language and Literature* 28(3): 280-304.
- Shigematsu, E. (2022) "How Do Characters Perceive Their World? Representation of Perception from Traditional Past-tense Narrative to Contemporary Present-tense Narrative." *Journal of Literary Semantics* 51(1): 37-53.
- Shigematsu, E. (forthcoming) "Is It Narration or Experience? The Narrative Effects of Present-tense Narration in Ali Smith's *How to Be Both*." *Language and Literature*
- Weinrich, H. (1964) *Temps. Besprochene und erzählte Welt*. 4<sup>th</sup> edn. Stuttgart: Kohlhammer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 2件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 Eri Shigematsu	4. 巻 51(1)
2. 論文標題 How do characters perceive their world? Representation of perception from traditional past-tense narrative to contemporary present-tense narrative	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Journal of Literary Semantics	6. 最初と最後の頁 37-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/jls-2022-2049	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Eri Shigematsu	4. 巻 -
2. 論文標題 Is it narration or experience? The narrative effects of present-tense narration in Ali Smith 's How to Be Both	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Language and Literature	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/09639470221090865	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 重松恵梨
2. 発表標題 現在時制と小説：過去時制語りから現在時制語りへ
3. 学会等名 近代英語協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Eri Shigematsu
2. 発表標題 What is present-tense narration? Narrative typologies revisited
3. 学会等名 ERA
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Eri Shigematsu
2. 発表標題 Representation of perception in the novel: From traditional past-tense narrative to contemporary present-tense narrative
3. 学会等名 Poetics and Linguistics Association (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重松恵梨
2. 発表標題 初期近代英語における話法：デフォーの一人称自伝小説を事例に
3. 学会等名 中国四国英文学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関